

ヴァイマル共和国初期におけるボード・ウーゼの義 勇軍経験：エゴ・ドキュメントにもとづく予備的考 察

今井，宏昌
九州大学大学院人文科学研究院歴史学部門

<https://doi.org/10.15017/1912779>

出版情報：史淵. 155, pp.81-102, 2018-03-14. 九州大学大学院人文科学研究院歴史学部門
バージョン：
権利関係：

ヴァイマル共和国初期における ボード・ウーゼの義勇軍経験

—エゴ・ドキュメントにもとづく予備的考察—

今井宏昌

はじめに

1918年秋、ドイツに訪れた敗戦と革命は、ホーエンツォレルン家による帝政を終わらせ、ドイツが新たに共和国として出発する上での、重要な契機を形づくった。しかし、そこでは「国家暴力が弱体化し、私兵や民間暴力が復活」という「歴史の逆転現象」が生じており、成立間もない共和国は、この「逆転現象」をいかにして克服するかという課題に直面することとなる⁽¹⁾。こうした中、崩壊状態に陥った正規軍に代わる形で、国内の治安維持や東部国境地域におけるポーランドとの国境闘争、そしてバルト地域での反ボルシェヴィキ闘争を展開したのが、志願兵部隊「義勇軍 [Freikorps]」である。その活動は1919年を通じ、成立間もないヴァイマル共和国の基盤固めに間違いなく寄与した。だが、その一部は1920年3月の反政府クーデタ・カップー揆に参加し、共和国政府に叛旗を翻すことになる。一揆の挫折後、義勇軍は公式に解体されるが、その一部は地下に潜伏し、1923年9月にフランス占領軍に対するルール闘争が終結するまで、政治的暗殺に代表される数々の暴力行為に及んだ⁽²⁾。

従来の研究において、義勇軍は往々にして「ナチズムの前衛」（ロバート・G・L・ウェイト）と評価され、またその経験もナチズムの台頭やホロコーストの発生につながるものと位置づけられてきた⁽³⁾。これに対し筆者は、拙著『暴力の経験史』において、義勇軍およびその経験の歴史的再評価を試みた。

具体的には、ナチのアルベルト・レオ・シュラーゲター（1894-1923）、共和派のユリウス・レーバー（1891-1945）、そして коммуニストのヨーゼフ・ベッポ・レーマー（1892-1944）といったように、相異なる政治的道程を歩んだ3名の義勇軍戦士のバイオグラフィを比較検討し、その結論として、①義勇軍経験とその前後の経験の複合により、主体の態度や行動に差異や偏差が生じる点、②それぞれの経験が交差・共振した点、③そして3名の共通項として、「暴力を辞さないアクティヴィズム [gewaltbereiter Aktivismus]」というべき姿勢が存在した点を明らかにした⁽⁴⁾。

ただし、筆者がここで対象とした人物はみな、1890年代に生まれた「(若き) 前線世代 [(Junge) Frontgeneration]」と呼ばれる人びとであり、彼らと並んで義勇軍運動を支えた1900年代生まれの「戦時青少年世代 [Kriegsjugendgeneration]」に関しては、未検討にとどまっている。しかしこの「戦時青少年世代」こそ、ヴァイマル期からナチ期にかけて、過激な主義主張や政治的暴力の主要な担い手となった人びとであり、この世代に属する義勇軍戦士の中からは、ヴェルナー・ベスト（1903-1989）やラインハルト・ハイドリヒ（1904-1942）、そしてハインリヒ・ヒムラー（1900-1945）など、のちにナチ体制の中樞を担う人物が多数輩出されている⁽⁵⁾。それゆえ筆者の研究の次なる課題は、この「戦時青少年世代」の義勇軍経験がもつ歴史的意味を問うことにある。

本稿ではその最初の段階として、ボード・ウーゼ（1904-1963）という人物に注目してみたい。義勇軍運動に参加後、シュトラッサー兄弟率いる「ナチ左派」のジャーナリストとして活躍した彼は、ヴァイマル末期になるとドイツ共産党（KPD）が主導する反ファシズム運動へと合流し、1933年のヒトラー内閣成立後はフランスの首都パリへと亡命した。彼はそこで亡命KPDに入党し、その後はスペイン内戦に国際旅団の一員として参加し、また第二次世界大戦期にはアメリカやメキシコにおいて亡命組織を結成した。戦後はソ連占領地区に帰還し、ドイツ民主共和国（DDR）の建国以降は、その代表的な作家、社会主義統一党（SED）の議員として活躍することになる⁽⁶⁾。一時はナチに身を

置きつつも、同世代のベストやハイドリヒ、ヒムラーとは異なり、最終的に反ファシズムの闘士となる彼の人生において、義勇軍経験はどのような意味をもつのか、またその経験はその他の経験とどのように絡まり合い、戦後ドイツ史に何をもたらしたのか——これらの点を明らかにすることが、筆者の研究の当面の課題となる。

ウーゼに関する研究は、基本的に生誕80周年にあたる1984年を機に本格化した。しかしながら、文学研究の関心の高さに比べて歴史研究は低調であり、また管見の限り、アウトラインを除いてウーゼの全生涯を扱った伝記研究は今なお存在しない⁽⁷⁾。こうした中、文書館史料を含む数多くの史料を用いて、主にヴァイマル末期におけるウーゼの活動と、それを題材とする自伝的小説『傭兵と兵士 [Söldner und Soldat]』の分析にあたったのが、カイ・ドーンケの一連の研究である⁽⁸⁾。しかしそこでも、ウーゼの義勇軍時代は簡単に触れられる程度である。

したがって本稿では、義勇軍出身者ウーゼの生涯を経験史的に問い直すための前段階として、ひとまずはヴァイマル初期を中心に、誕生から義勇軍時代までのウーゼの道程を再構成し、予備的考察をおこなうこととしたい。その際、史料としては、ウーゼが自らのことを記した「エゴ・ドキュメント [Ego-Dokument]」を中心に用いる⁽⁹⁾。ただし今回は、ウーゼが生涯を通じて発表した自伝的小説の利用は、極力控えることとしたい。なぜならドーンケが指摘するように、そこでは出来事の入れ替えやフィクションの挿入が常態化しているからである⁽¹⁰⁾。

本稿で主に利用するのは、ウーゼ『全集』の編集者であるギュンター・カスパーが編纂した、親友ハンス・ゼーヴェリットに宛てたウーゼの手紙と、パリ亡命時代の1934年12月に発表したウーゼの自伝的概略「誤りと遠回り [Irrtümer und Umwege]」である⁽¹¹⁾。またこれらの史料を補う形で、ウーゼが遭遇した事件や周辺的人物に関する先行研究もまた、再構成の作業に利用することとしたい。

I. ヴァンダーフォーゲルへの逃避

ボード・ウーゼは1904年3月12日、西南ドイツはバーデンの都市ラシュタットにて、プロイセン将校の息子として生を受けた。兄弟としては、上に兄ヨアヒム（1902-1943）が、また下には弟ハンス＝ユルゲン（1908-1944）がいた⁽¹²⁾。自身の家系について、ウーゼはパリ亡命時代の1934年12月に発表した自伝的概略の中で、その源流が17世紀のプレスラウ〔現在のポーランド領ヴロツワフ〕に居住していたプロテスタントの織物商人、ザムエル・エルトマン・ウーゼにまで遡ることができるとしている。そしてそれから約250年間、ウーゼの一族は聖職者や教師、法律家、そして佐官級以下の将校といったように、「中流の中の中流といった生活環境で暮らしてきた」。だが、その環境は「法律顧問官だった祖父の時代までは上手くいっていたものの、それからは没落の一途を辿った」という⁽¹³⁾。

こうした一族をめぐる生活環境の悪化と並行する形で、幼少期のウーゼをとりまくプライベートな家庭環境もまた、時を経るにつれ居心地の悪いものになっていった。ウーゼ家は1908年になると、家父長たるヴァルター・ウーゼ中尉の赴任地の関係から、東部国境地域に位置するシュレージエン西部の都市グローガウ〔現在のポーランド領グウォグフ〕へと移り住んだ。ところが父ヴァルターはその後、かさんだ借金の返済のために軍を退役し、しばらくの間単身エチオピアへと赴くことになる。こうした中、ウーゼは1911年から12年にかけて、一時ブラウンシュヴァイクの祖父母のもとでの生活を余儀なくされた。そこには家庭内不和も関係しており、両親は1913年に正式に離婚を果たした。このように家庭の事情で居住地が二転三転した関係から、ウーゼがグローガウの基礎学校〔Grundschule〕で正規の授業を受けるようになったのは、ようやく10代に入ってからのことだった⁽¹⁴⁾。

1914年夏に第一次世界大戦が勃発すると、父ヴァルターはドイツに戻って軍に復帰し、さらには再婚を果たした。しかしウーゼは、新たに家族の一員となった継母と折り合いがつかず、次第に家族を避けるようなる。こうした

中、彼がのめり込んでいったのは、ドイツ青年運動の原点とされるヴァンダーフォーゲル運動だった⁽¹⁵⁾。

ヴァンダーフォーゲル運動は、1896年春にベルリン郊外のギムナジウムの生徒らが始めた徒歩旅行に端を発し、その後ドイツ語圏全体に拡大・浸透していった「下からの」自律的運動である。担い手は主として、教養市民層および中間層出身の青少年であり、その多くが12歳から19歳までの年齢集団に属していた。彼らは幼少期・思春期に体験したドイツ社会における急速な工業化・都市化のプロセスに強い反発心を抱き、週末や休日になるとテント、リュックサック、そしてギターとともに都市を離れ、民謡を口ずさみながら森や田園、山野を逍遥し、自然と農耕へのロマン主義的崇拜に明け暮れた⁽¹⁶⁾。

また、ヴァンダーフォーゲル運動の内部では、指導者原理や連帯精神によって支えられた有機的な人的結合関係が形成されていた。それぞれのグループは、基本的にひとりのリーダーによって統率されており、その年齢は大抵の場合、一般のメンバーよりも3歳から6歳ほど年上であった。リーダーとなる人間には「高い成熟度と深い経験、多くの知識、そしてできることなら十分強靱な肉体」が求められ、さらにその前提として、他のメンバーから「ある種の尊敬の念」を獲得しなければならないとされていた。そしてそのメンバーらは「信頼できるリーダー」のもとで、互いを「君 [du]」と呼び合うような親密な関係を構築したという⁽¹⁷⁾。

こうしたヴァンダーフォーゲル運動におけるロマン主義的傾向、そして有機的な人的結合関係は、家庭に居場所を失ったウーゼの瞳に、これ以上ないほど魅力的なものに映った。彼は自伝的概略において、「もはや家庭生活とすら呼べない生活での、貧乏臭いピューリタニズムへの反抗、他のどこにも存在しないような共同体への憧れと欲求が、私を青年運動へと駆り立てたのである」と振り返っている⁽¹⁸⁾。

ただその一方で、第一次世界大戦期のウーゼは、父親と同じ将校になるという将来への展望を抱いてもいた⁽¹⁹⁾。これについてはドーンケが指摘するように、「典型的な階級的キャリアの継承」とみるべきであろうし⁽²⁰⁾、ウーゼ自身

も「私にとって最初のブルジョワ的願望」であったと回顧している⁽²¹⁾。しかしこの点に関しては、同時代的背景として、1914年8月の開戦が教育の戦時化を促したことも考慮に入れる必要がある。アンドリュウ・ドンソンの研究が明らかにしたように、大戦期ドイツの学校教育では児童や生徒を戦時の熱狂へと駆り立て、さらには兵士として必要な「強靱な男らしさ」を男子に備えさせるための様々な試みがなされていた⁽²²⁾。ウーゼの将校への憧れは、こうした戦時教育によって増幅されたとみるべきだろう。

またこれと並んで重要なのが、ウーゼも参加していたヴァンダーフォーゲル運動内部の動きである。そこでは開戦を機に戦争へのロマン主義的憧憬が広まり、メンバーの多くが従軍に名乗りをあげた。彼らは戦争を自らにとっての試練、「新しい人間」へと鍛え上げてくれる偉大な経験として捉えたのであった⁽²³⁾。この当時、ウーゼはまだ10歳であり、さすがに志願はしなかったようである。ただしヴァンダーフォーゲル運動の中では、彼とあまり歳が変わらない年少のメンバーさえ、自らに兵籍が付与されないまま戦争が終わることを危惧し、独断で前線に赴こうとする動きもみられたのである⁽²⁴⁾。

しかしドイツ社会全体からすると、こうした熱狂は「特定のブルジョワ的諸集団における、主には大都市的な現象」でしかなく、またそれすらも戦争の長期化とともに次第に薄れていった⁽²⁵⁾。そして周知のように、ドイツの軍事的敗北が決定的となり、また戦争の早期決着と体制の民主化を求める声が革命運動へと転じた結果、1918年11月9日には帝政の終結が宣言され、さらに11日にはドイツと連合国との休戦協定が締結されることになる。

1918年11月のドイツ革命は、ウーゼ家の没落をよりいっそう深める結果となった。父ヴァルターはこれにより将校としての身分を失い、ウーゼも将校になるという将来への見通しを絶たれてしまった⁽²⁶⁾。一家は1919年初頭、ポーランドとの国境闘争が始まったグローガウを離れ、ベルリンへと移住することを決断する⁽²⁷⁾。父ヴァルターは百貨店の警備員の職に落ち着き、またウーゼもシュテグリュッツの実科高等学校 [Oberrealschule] への通学を始めた⁽²⁸⁾。そうした中、ウーゼは次第に自身の家庭環境だけでなく、時代状況そのものに

居心地の悪さを感じるようになる。彼はのちに、それを自分個人の問題ではなく、自分の属する世代全体の問題として捉え、回顧したのであった。

われわれは君主制にさして興味がなかったし、破滅からプライベートな生活に逃げ込んだ皇帝などは、英雄でもなければ殉教者でもなかった。われわれは古きものに反対し、また若き共和国には全く好感がもてなかった。この共和国が登場したことで、一度は管制高地 [Kommandohöhe] に持ち場を構えるのだ、という自明であったはずの期待が、大きく揺らいでしまったのである⁽²⁹⁾。

II. 闘争と抗争の日々

第一次世界大戦を通じて一度も前線へ赴くことなく、また大戦後は将校になることすら許されなかったウーゼに対して、大戦直後のドイツはしかし、義勇軍運動という魅力的な活躍の場を提供した。ウーゼ家に移り住んだ1919年初頭の首都ベルリンでも、義勇軍を中心とする政府側部隊と左翼急進派とのあいだで大規模な武力衝突が勃発し、またそれを目撃したギムナジウムの生徒たちが「祖国の救済」を志し、義勇軍への入隊を決意するという光景がみられた⁽³⁰⁾。こうした中でウーゼもまた、遅くとも1920年3月までには短期志願兵 [Zeitfreiwilliger] としてその隊列に加わることになる。

1920年3月12日夜から13日早朝にかけて、ベルリンでは極右政治家ヴォルフガング・カップを首謀者とする反政府クーデタ・カップ一揆が勃発し、義勇軍や正規軍たる「国軍 [Reichswehr]」の一部が実働部隊としてベルリン市内を占拠した。そして16歳になったばかりのウーゼもまた、このとき国防省付の伝令係としてクーデタに参加することになる⁽³¹⁾。

ウーゼがこのとき、戦闘行為に直接的に参加したかは不明である。自伝的概略の記述によると、彼は反カップ派の労働者ストライキが勃発した際、それに立ち向かうわけでもなく、むしろ「この転換を前に取り乱し」、「公文書や名簿

を焼却する」作業に従事するほかなかった⁽³²⁾。ドーンケはこうしたウーゼの行動について、「(むろんまじめな政治的次元をともなっているものの) およそ一種のロマン主義的なボーイスカウト遊戯と考えるべきだろう」としている⁽³³⁾。ただし、そこに暴力的な契機が内在していた点を見逃すべきでない。カップー揆自体は共和国政府が呼びかけた労働者ストライキにより数日で挫折するものの、ドイツ社会ではこれ以降、街頭での暴力行使の度合いがさらなるエスカレートを遂げることになる⁽³⁴⁾。そしてウーゼ自身もまた、カップー揆からしばらく間を置いたのち、実際に労働者を相手とする街頭闘争に関与していくことになる。

ウーゼは1920年春以降も、基本的にはベルリンに留まり、家族と暮らしながらシュテューグリッツの実科高等学校に通学する日々を送った。しかし彼はもはや、そこで生活に耐えられなかったようである。1921年6月までに家族と袂を分かち、ベルリンを去ることを決意した彼は、自らの新天地をバイエルン州オーバーフランケン都市バンベルクに定めた。そしてこの17歳の青年は、同地における右翼ナショナリスト系の日刊紙『バンベルガー・タークブラット [Bamberger Tagblatt]』の見習いジャーナリストとして生計を立てることになる⁽³⁵⁾。ウーゼは学友であり親友であるハンス・ゼーヴェリットに宛てた手紙の中で、「僕は自分の職に非常に満足しているし、じきに新聞の仕事にも慣れるよう願っている」と記している⁽³⁶⁾。

パリ亡命時代の1935年に刊行された自伝的小説『傭兵と兵士』では、まさにこのバンベルクへの移住から物語が始まる。ウーゼはここで、自身の『バンベルガー・タークブラット』紙への就職を、「ゲープザッテル将軍のとりなしのおかげ」としている⁽³⁷⁾。先行研究ではまったく指摘されていないが、この「ゲープザッテル将軍」とはおそらく、第一次世界大戦前から右翼結社「全ドイツ連盟 [Alldeutscher Verband]」の中核を担い、反セム主義者として名高かったバイエルンの退役将軍、コンスタンティン・フォン・ゲープザッテル (1854-1932)、もしくはその弟で、大戦中にバイエルン第三軍団の司令官 [Kommandierender General] を務め、大戦後の1919年4月にはバンベルクで

反革命の「市民軍 [Bürgerwehr]」を率いたルートヴィヒ・フォン・ゲープザッテル (1857-1930) のどちらかと思われる⁽³⁸⁾。いずれにしる、ウーゼの叙述を信じるのであれば、彼は1921年初夏にバンベルクにやって来た時点で、すでに右翼急進派のミリューに属していたといえよう。

実際、バンベルクに拠点を移したウーゼは、見習いジャーナリストとして活躍する傍ら、1921年12月に「オーバーラント同盟 [Bund Oberland: BO]」という右翼結社に参加した。この結社は、1919年4月25日にバイエルン・レーテ共和国打倒を目的として、極右秘密結社「トゥーレ協会 [Thule-Gesellschaft]」の主導により、バイエルン第三軍団指揮官アルベルト・フォン・ベックフ少佐 (1870-1958) のもとで結成された「オーバーラント義勇軍 [Freikorps Oberland]」の後継組織であった⁽³⁹⁾。1921年5月以降、オーバーシュレージエンにてポーランド人志願兵部隊との国境闘争を繰り返していたオーバーラント義勇軍は、7月初頭に連合国の要請に応じる形で解散を余儀なくされる。しかしその中核メンバーらは以後も活動を継続し、解散から4ヶ月後の10月31日、社団法人 [e.V.] としてBOを結成したのであった⁽⁴⁰⁾。

ウーゼはBOに参加する直前、親友ゼーヴェリットに宛てて、次のように自らの心境を吐露している。

もし一度、本当の「革命」が起きさえすればな。全部が変わる。駄目なのが根絶やしにされて、良い人間が守られる。もし僕らに本当の民族指導者 [Volksführer] がいるとしたら、その人たちは国民社会主義的 [national-sozialistisch] に違いないだろう⁽⁴¹⁾。

この手紙からは、ウーゼが1921年末の段階ですでにナチズムにかなり近い立場にあった点を窺い知ることができる。ただ、彼がそこからすぐナチ党に入党したわけでもない。そこに至るまでには、まだ時間が必要であった。

BOに参加してから約2年間、ウーゼが組織の一員として従事したのは、労働者との街頭闘争であった。自伝的概略によると、彼はこの闘争の中で、「労

働者階級を、陰鬱で敵意に満ちた暴力そのものとして体験した」という⁽⁴²⁾。またBOは、1922年12月27日に「社団法人・祖国地区協会連盟 [Verband der Vaterländischen Bezirksvereine Münchens e.V.]」への加盟を果たし、バイエルン州の「非常時警察 [Notpolizei]」の一員となった⁽⁴³⁾。ウーゼ曰く、そこでは「国軍や警察の兵営がわれわれのために解放された。出陣、反復訓練、射撃訓練など、ごく当たり前のことだった」⁽⁴⁴⁾。BOでの日々は、ウーゼに初めて本格的な戦闘経験を授けるとともに、将校になるという彼の少年時代の願望を、ひとまず代用的に満たしたといえよう。

ただ、ウーゼが参加した労働者との闘争は、本来的にはBOが掲げた組織の基本原則と矛盾するものだった。なぜならそこでは、①ヴェルサイユ条約の破棄と、②国 [Reich] への無条件の忠誠および国の一体性 [Reichseinheit] の維持とともに、③階級闘争の拒否が掲げられたからである⁽⁴⁵⁾。これは基本的に、組織の精神的支柱を担ったヨーゼフ・ベッポ・レーマー大尉とその同志たちが掲げた方針であり、労働者や коммуニストと共闘しながらポーランド人志願兵部隊に立ち向かったという、1921年初夏のオーバーシュレーゲンでの闘争経験にもとづいていた⁽⁴⁶⁾。

では、なぜそうしたBOが労働者との闘争を展開したのだろうか。その背景には、組織内の路線対立が存在していた。1921年末にウーゼが参加した段階で、BOではすでに3つの路線が鼎立状態にあった。第一の路線は、君主主義的分離主義の傾向、ないしはそれと提携する市民的傾向であり、前者はバイエルンの独立、ならびにヴィッテルスバッハ家の皇太子ルプレヒトが統治するアルペン国家の形成を熱望し、また後者は反共和国という点で前者と共闘関係にあった。第二の路線はナショナリスティック傾向であり、彼らの多くはナチズムに共鳴し、その後1923年11月のミュンヘン一揆に参加することとなる。そして第三の路線はレーマー周辺、特にかつてのオーバーラント義勇軍の指導者層を中核とした兵士のかつナショナル・ボルシェヴィスト的傾向であり、彼らは反西欧の立場から、 коммуニストやソ連との連携を唱えていた⁽⁴⁷⁾。

ウーゼはこの点について、「バイエルン・ブルジョワジー内の分離主義的潮

流との闘争」が、元を辿れば「世代の問題」だったと回想している⁽⁴⁸⁾。ここからわかるのは、彼にとって分離主義が「古きもの」、つまりは唾棄すべき対象と位置づけられていたことである。こうした中、君主主義的分離主義の傾向は、BO内において確固たる支持を集めることなく、フェードアウトすることになる。そして残る2つの傾向のうち、ウーゼが選択したのは、親ナチの姿勢を打ち出すナショナリスト的傾向だった。1923年2月27日、『バンベルガー・タークブラット』に掲載された「われら若者 [Wir Jungen]」と題するウーゼ唯一の署名記事からは、その理由の一端を垣間見ることができる。そこで彼は「自由で、なおかつ巨大な民族共同体 [Volksgemeinschaft]」の形成を訴え、「死でも悪魔でもかかってこい！ ハイル！ [Trotz Tod und Teufel! Heil]」という言葉文末に添えたのであった⁽⁴⁹⁾。

Ⅲ. 「ベルリン進軍」への期待と失望

BO内の路線対立は、1923年を迎える中で、よりいっそう激しさを増していった。そこにおいては、同年1月に開始されたフランス＝ベルギー連合軍のルール占領に対し、どのような対応をとるべきかで意見が二分されたのである。この当時、BOの指導者を務めていたのは、内部のナショナリスト的傾向、すなわち親ナチ派を代表するフリードリヒ・ヴェーバー（1892-1955）という人物であった。彼はルール占領を共和国崩壊の絶好の機会とみなし、「われわれのスローガンは『フランスを打ち倒せ！』ではなく『11月の犯罪者を打ち倒せ！』でなければならない」⁽⁵⁰⁾と主張するヒトラーの方針に従う形で、ルール闘争への不参加を表明した。これに対し、兵士的かつナショナル・ボルシェヴィスト的傾向を体現するレーマーらは、独断でルール闘争のための準備を進め、この結果3月15日にBOから除名されることとなる⁽⁵¹⁾。

かくして指導者ヴェーバーのもと、BOは着実にナチ党との関係を深めていった。そしてこの動きは、ナチ党首アドルフ・ヒトラーの意志にも沿うものであった。周知のように、ヒトラーはイタリア・ファシスト党首ベニト・

ムッソリーニが1922年10月に成功させた「ローマ進軍」に倣う形で、クーデタによる政権獲得を目指していた。そして来る「ベルリン進軍」への準備として、BOをはじめとする義勇軍の後継組織の糾合を進めていたのである。この結果、1923年9月1日から2日かけてニュルンベルクで開催された右翼集会「ドイツ会議 [Deutscher Tag]」では、ナチ党の突撃隊 (SA) と右翼のパラミリタリ組織である「帝国国旗団 [Reichsflagge]」、そしてBOからなる「ドイツ闘争同盟 [Deutscher Kampfbund]」の結成が宣言されることになる⁽⁵²⁾。

このようにBOとナチの一体化が進む中、ウーゼはその様子を心の底から歓迎していたようである。1923年8月29日、親友ゼーヴェリットに宛てた手紙の中で、ウーゼは目前に迫った「ドイツ会議」に対する期待を、次のように綴っている。

次の日曜、僕たちはニュルンベルクで大々的にドイツ会議を開催する。そこにはヒンデンブルクとルーデンドルフも来るらしい。だいたい50万人、すべての愛国的団体の構成員が参加する見込み。当日は僕たちのところで、大行列の立派なパレード行進がおこなわれる予定なんだけど、オーバーラントはそこで全隊列の先陣をきって行進するんだ⁽⁵³⁾。

そして「ドイツ会議」が終わったあとも、ウーゼはゼーヴェリットに向けて「ニュルンベルクは素晴らしかった。偉大な体験だった」と伝えたのだった⁽⁵⁴⁾。

右翼青年ウーゼが熱狂をもって迎えたこの集会は、左翼勢力においても、「ファシストの危険」に対する危機感を増幅させるほどのインパクトをもった。熊野直樹氏が指摘するように、「ベルリン進軍」に向けた右翼勢力の動きに対し、かねてから危機感を抱いていたのは、バイエルンと州境を接するテューリンゲンとザクセンの両州政府であり、また現地のドイツ社会民主党 (SPD) とドイツ共産党 (KPD)、そして労働者層であった。特にニュルンベルクで「ドイツ会議」が開催されて以降、テューリンゲンとザクセンの両州では「プロレタリア百人隊 [Proletarische Hundertschaften]」を称する労働者自衛組織の

代表者会議が開かれ、百人隊こそ「ファシズムに対する闘争」の前衛部隊であり、またその後方にプロレタリア統一戦線が位置することが確認された。さらにテューリンゲン州ではこうした動きを受け、KPDの地区指導部や州議会議員団、そして経営評議会の州委員会ならびにテューリンゲン管理委員会が、プロレタリア百人隊の創設を公表し、また「全ファシスト組織の即時の解散と武装解除」を要求する声明を連名で発表した。これにより、バイエルンとテューリンゲンの州境では、右翼勢力と左翼勢力との緊張がよりいっそう高まることになる⁽⁵⁵⁾。

ウーゼの自伝的概略を読む限り、彼はこうした中で、バイエルンの労働者層との闘争だけでなく、「ザクセンやテューリンゲンから、今にもバイエルンの州境に迫り来ると思われた労働者層との対峙と対決」にも従事したようである⁽⁵⁶⁾。そしてこのときの経験は、ウーゼにとってある種のターニング・ポイントをもたらしたとされる。

装備の面で、われわれは武装だけでなく、とりわけ輸送手段や資金でも優位を誇っていた。だがそうした優位は、われわれがこの衝突において、しばしば屈辱的な敗北を喫することへの歯止めとはならなかった⁽⁵⁷⁾。

このように、装備の面で劣った労働者層に対する「屈辱的な敗北」は、ウーゼにおける闘争へのモチベーション低下へとつながった。そして彼は次第に、ドイツ「解放」に向けた労働者との共闘を訴える青年保守派のアルトゥール・メラー・ファン・デン・ブルック（1876-1925）の思想や、社会民主主義とナショナリズムの結合を試みたSPD右派のパウル・レンシュ（1873-1926）、アウグスト・ヴィニヒ（1878-1956）らの思想に惹かれていき、最終的にナチ党、とりわけシュトラッサー兄弟が率いる「反対派」に所属するようになったのだという⁽⁵⁸⁾。ただし、ウーゼがいわゆる「ナチ左派」としての立場を明確にするのは、早くとも1927年に入ってからのことである。それゆえ1923年の段階では、彼の思想はさまざまな右翼思想を寄せ集めたアマルガムに過ぎなかった

といえる⁽⁵⁹⁾。

1923年11月9日、BOはドイツ闘争同盟の加盟組織として、ナチ党を中心とする反政府クーデタ・ミュンヘン一揆に加わり、ナチ党とともに手痛い敗北を喫した。このとき、BOのメンバーとして一揆に参加したウーゼは、それから8ヶ月後の1924年7月3日、親友ゼーヴェリットへの手紙で「あらゆる体験の中で、1923年11月9日は、迫り来る巨大な岩のように突出している」とし、次のように続けている。

このとき僕らが受けた苦しみを、君は理解できるのかい。僕らの祖国は力強く復活を遂げるのだと、誇らしく愉快に確信していたのに、それがイエズス会の手下どものせいで台無しになったんだ。これまでの僕は何だったんだろう、そして今の僕は何なんだろう？⁽⁶⁰⁾

ここにおいて、ミュンヘン一揆を「台無し」にしたとされる「イエズス会の手下ども」とは、カトリックのバイエルン分離主義者のことを指しており、ミュンヘン一揆が結局のところ、ローマ教皇権を至上とするバイエルンの分離主義者によって体よく利用されたとの認識にもとづいている。そしてこうした認識は奇しくも、1923年3月にBOから除名されたレーマーのミュンヘン一揆認識と重なり合うものであった⁽⁶¹⁾。しかしながら、レーマーがその後KPDとの関係を深めていったのとは対称的に、ウーゼはナチ党に入党し、「ナチ左派」のジャーナリストとして頭角を現すことになる。両者がふたたび戦線を同じくするのは、KPDが主導する反ファシズム運動においてであり、それはヴァイマル末期を待たねばならない⁽⁶²⁾。

おわりに

ウーゼが幼少期に身につけたロマン主義や共和国への憎悪は、彼を義勇軍運動へと誘い、また義勇軍における反政府クーデタや街頭闘争の経験は、彼の

で「暴力を辞さないアクティヴィズム」を確実に育てていったといえる。ただ、これまで筆者が検討してきた「前線世代」の場合と異なるのは、義勇軍運動の終結する1923年までの段階ではまだ、その経験が彼の思想と行動に強固な基盤を与えたとは言い難い点である。そうした不安定さは、ウーゼがそこからナチ党に入党するまで数年を要したことから窺えるし、また何よりも、彼がミュンヘン一揆挫折後に親友に吐露した「これまでの僕は何だったんだろう、そして今の僕は何なんだろう」という言葉に象徴されている。

ウーゼは戦後、自分と同じようにナチ陣営から反ファシズム陣営に転じたリヒャルト・シェリングー（1904-1986）が、自伝的小説『大いなる運命 [Das große Los]』を西ドイツに続いて東ドイツでも刊行した際、その第2版に「序文にかえて [An Stelle eines Vorworts]」という公開書簡を寄せた⁽⁶³⁾。それは義勇軍経験を有する「戦時青少年世代」の晩年の回想的証言といえるものであるが、そこでは彼らの「暴力を辞さないアクティヴィズム」がもつ、不安定さと無軌道ぶりが見事に表現されている。

不良と、スタンダード的な英雄たる魂の兄弟との見事な混合体であるわれわれは、燃える野心のもと、世界史のハンドルに手をのばすことができると思っていた。そして何事にも居合わせねばならないと固く信じていた。われわれは何事にもできる限り表立って関与しようとしたし、われわれの関与なしにドイツで何かしらの事件が起きる可能性については、心の奥底まで侮辱されているようで、想像すらできなかつた。もちろん関与といっても、それは傍観者としての関与などでは断じてない！ われわれは劇場の観客席から事件を眺めていたのではないし、そのような席がわれわれのために用意されたこともない。われわれは行動し、アクターたろうとしたのだ。われわれの押し寄せた舞台では、1918年から1933年にかけてのあいだ、ドイツの運命劇が上演されていた。そこでの衣装は父親たちが脱ぎ捨てた軍服だったが、それはわれわれにはまだ大きすぎた。そしてわれわれは、自分の演じようとする役柄の台本を、まったくといってよいほど覚

えきれなかった⁽⁶⁴⁾。

1924年以降、ないしは1933年以降、ウーゼが自らの義勇軍経験をどのように受け止め、またその「暴力を辞さないアクティヴィズム」がどのような形で定まっていたのか、この点に関しては、後日の課題としたい。

注

- (1) 星乃治彦「街頭・暴力・抵抗」田村栄子／星乃治彦編『ヴァイマル共和国の光芒：ナチズムと近代の相克』昭和堂、2007年、258-259頁。
- (2) M. Sprenger, *Landsknechte auf dem Weg ins Dritte Reich? Zu Genese und Wandel des Freikorpsmythos*, Paderborn 2008, S. 10.
- (3) R・G・L・ウエイト（山下貞雄訳）『ナチズムの前衛』新生出版、2007年。
- (4) 拙著『暴力の経験史：第一次世界大戦後ドイツの義勇軍経験 1918～1923』法律文化社、2016年。
- (5) 例えば、U. Herbert, *Best. Biographische Studien über Radikalismus, Weltanschauung und Vernunft 1903–1989*, Bonn 1996; M. Wildt, *Generation des Unbedingten. Das Führungskorps des Reichssicherheitshauptamtes*, Hamburg 2002; K. Mues-Baron, *Heinrich Himmler. Aufstieg des Reichsführers SS (1900–1933)*, Göttingen 2011; U・ヘルベルト（芝健介訳）「『即物主義の世代』：ドイツ1920年代初期の民族至上主義学生運動（上・下）」『みすず』493-494号（2002年）；C・アングラオ（吉田春美訳）『ナチスの知識人部隊』河出書房新社、2012年；R・ゲルヴァルト（宮下嶺夫訳）『ヒトラーの絞首人ハイドリヒ』白水社、2016年を参照。
- (6) 本稿年表参照。
- (7) 高村宏『ドイツ反ファシズム小説研究』創樹社、1986年；同『ドイツ反戦・反ファシズム小説研究』創樹社、1997年は、スペイン内戦文学のひとつとしてウーゼ作品を分析した先駆的業績である。G. Caspar, *Leben und Werk. Eine Chronik*, in: ders. (Hg.), *Über Bodo Uhse – ein Almanach. Aufsätze und Erinnerungen, mit Karikaturen, Photographien und Faksimiles*, Berlin (O) 1984; K. Walther, *Bodo Uhse. Leben und Werk*, Berlin (O) 1984 は、ともにウーゼ生誕100周年に東ドイツで刊行された書物であり、そこではウーゼの生涯の輪郭が素描されている。R. v. Hanffstengel, *Mexiko im Werk von Bodo Uhse. Das nie verlassene Exil*, New York 1995はウーゼ作品におけるメキシコ像を分析しており、B. Schmidt, *Wenn die Partei das Volk entdeckt. Anna Seghers, Bodo Uhse, Ludwig Renn u.a. Ein kritischer Beitrag zur Volksfrontideologie und ihrer Literatur*, Münster 2002はウーゼ作品から人民戦線イデオロギーを分析している。最近では、D. Bores, *Das ostdeutsche P.E.N.-Zentrum 1951 bis 1998. Ein Werkzeug der Diktatur?*, Berlin 2010が東ドイツ国際ベ

ンセンターでのウーゼの役割を解明している。

- (8) K. Dohnke, Propagandistische Aktion und politische Erkenntnis. Der Schriftsteller Bodo Uhse und seine Itzehoeer Zeit (1929–1931), in: Stadt Itzehoe (Hg.), *Itzehoe. Geschichte einer Stadt*. Bd. 2: *Von 1814 bis zur Gegenwart*, Itzehoe 1991; ders., Rechenschaft über einen deutschen Irrweg. Zum Verhältnis von Realität und Fiktion in Bodo Uhse's Exilroman „Söldner und Soldat“, in: A. Ritter (Hg.), *Literaten in der Provinz — Provinzielle Literatur? Schriftsteller einer norddeutschen Region*, Heide 1991; ders., Von den merkwürdigen Memoiren eines jungen Mannes. Bodo Uhse's Exilroman „Söldner und Soldat“ als Dokument deutscher Geschichte, Nachwort zu B. Uhse, *Söldner und Soldat*, Berlin 1992; ders., Völkischer Nationalismus und revolutionärer Habitus. Publizistische Strategie und ideologischer Wandel Bodo Uhse (1927–1932). Eine Fallstudie zur Weimarer Rechten, in: *Zeitschrift für Literaturwissenschaft und Linguistik (Lili)* 24 (1994).
- (9) エゴ・ドキュメントとは、「ある個人が自らのことを中心に書いた記録全般を指す用語であり、具体的には日記のみならず書簡、回顧録なども含む概念」である。鄭炳旭／板垣竜太「はじめに」同編『日記が語る近代：韓国・日本・ドイツの共同研究』同志社コリア研究センター、2014年、8頁。
- (10) Dohnke, Rechenschaft.
- (11) B. Uhse, Irrtümer und Umwege, in: *Unsere Zeit. Monatsschrift für Politik, Literatur, Wirtschaft, Sozialpolitik und Arbeiterbewegung*, Dezemberheft 1934, zit. nach: *Gesammelte Werke in Einzelausgaben*, hg. von G. Caspar, Bd. 1, Berlin (O) 1974, S. 593; G. Caspar, Nachbemerkung, in: ebd. なお、全集は以下 *GWE* と略記。
- (12) Caspar, *Leben*, S. 355. なお、兄ヨアヒムは1943年に独ソ戦下の砲兵隊員として、また弟ハンス＝ユルゲンも1944年に試験操縦士兼航空管制官として、ともにナチ陣営で命を落としている。
- (13) Uhse, *Irrtümer*, S. 593.
- (14) Ebd.; Caspar, *Leben*, S. 355–356; Dohnke, *Propagandistische Aktion*, S. 288.
- (15) Ebd.
- (16) ウェイト『ナチズムの前衛』16-17頁; W・Z・ラカー（西村稔訳）『ドイツ青年運動：ワンダーフォーゲルからナチズムへ』人文書院、1985年、44頁; 八田恭昌『ヴァイマルの反逆者たち』世界思想社、1981年、28頁; 田村栄子『若き教養市民層とナチズム：ドイツ青年・学生運動の思想の社会史』名古屋大学出版会、1996年、57, 66頁
- (17) ラカー『ドイツ青年運動』44-45頁; C・G・v・クロコウ（高田珠樹訳）『決断：ユンガー、シュミット、ハイデガー』柏書房、1999年、47-51頁; 八田『ヴァイマルの反逆者たち』29頁。
- (18) Uhse, *Irrtümer*, S. 594.
- (19) Ebd.

- (20) Dohnke, Propagandistische Aktion, S. 288.
- (21) Uhse, Irrtümer, S. 594.
- (22) A. Donson, *Youth in the Fatherless Land. War Pedagogy, Nationalism, and Authority in Germany 1914–1918*, Cambridge, Mass. 2010, 特に p. 61, 87. また, A. Weinrich, *Der Weltkrieg als Erzieher. Jugend zwischen Weimarer Republik und Nationalsozialismus*, Essen 2013, S. 46 も参照。
- (23) ラカー『ドイツ青年運動』17頁。モッセはこの「新しい人間」像が模索される中で、しばしば「戦闘的な男らしさ」が重視されたとしている。G・L・モッセ（宮武美知子訳）『英霊：創られた世界大戦の記憶』柏書房、2002年、67頁。
- (24) ラカー『ドイツ青年運動』115頁。
- (25) B. R. Kroener, *Militär, Staat und Gesellschaft im 20. Jahrhundert (1890–1990)*, München 2011, S. 73–74.
- (26) Uhse, Irrtümer, S. 594.
- (27) 当時のグローガウの状況については、W. Schumann, *Oberschlesien 1918/19. Vom gemeinsamen Kampf deutscher und polnischer Arbeiter*, Berlin 1961, S. 155–156, Anm. 264 を参照。
- (28) G. Caspar, Anhang, in: *GWE*, Bd. 4, Berlin (O) 1976, S. 662–663; Dohnke, Propagandistische Aktion, S. 288.
- (29) Uhse, Irrtümer, S. 594. また、このように帝政にもヴァイマル共和政にも馴染めないという世代意識は、戦間期のドイツ保守革命思想に典型的なものであった。この点については例えば、A. Mohler / K. Weissmann, *Die konservative Revolution in Deutschland 1918–1932. Ein Handbuch*, Graz ©2005; K・ゾントハイマー（河島幸夫／脇圭平訳）『ワイマール共和国の政治思想：ドイツ・ナショナリズムの反民主主義思想』ミネルヴァ書房、1976年；J・ハーフ（中村幹雄／谷口健治／姫岡とし子訳）『保守革命とモダニズム：ワイマール・第三帝国のテクノロジー・文化・政治』岩波書店、2010年を参照。
- (30) 例えば1919年2月初頭、ベルリンのヴィルヘルムス＝ギムナジウムのアビトゥーア資格保持者であった17歳の青年ハンス・ユングストは、父親宛ての手紙の中で、「わが祖国を救うためならどんなことでもやりたい」と志願の意志を綴っている。それはベルリン一月闘争における義勇軍の戦闘行為を目の当たりにした彼が、「国内と東方におけるボルシェヴィズムの危険」から「祖国を救済」することの意義を確信したからであった。ユングストによれば、彼と同じく義勇軍への志願を希望した学生は少なくなく、ヴィルヘルムス＝ギムナジウムには、「新たな激しい戦闘を待ち望む」雰囲気が存在していたという。Briefe von Hans Jüngst an Eduard Jüngst, 2.2.1919 und 6.2.1919, zit. nach: M. Fischer, *Dr. phil. habil. Hans Jüngst 1901–1944. Ein Leben im deutschen Zeitalter der Extreme*, Karlsruhe 2012, S. 26. またこの点については、拙著『暴力の経験史』第1章も参照。
- (31) Uhse, Irrtümer, S. 594.
- (32) Ebd., S. 594–595.

- (33) Dohnke, *Propagandistische Aktion*, S. 288.
- (34) この点については、D. Schumann, *Politische Gewalt in der Weimarer Republik 1918–1933. Kampf um die Straße und Furcht vor dem Bürgerkrieg*, Essen 2001, S. 84–95; S. Raßloff, *Flucht in die nationale Volksgemeinschaft. Das Erfurter Bürgertum zwischen Kaiserreich und NS-Diktatur*, Köln 2003, S. 196–205を参照。
- (35) Dohnke, *Propagandistische Aktion*, S. 288. なお、ドーンケはウーゼがバンベルクで活動を開始した時期を1921年7月としているが、これは6月の誤りである。
- (36) Brief von Bodo Uhse an Hans Severit, 2.6.1921, zit nach: Caspar, *Nachbemerkung*, S. 629.
- (37) B. Uhse, *Söldner und Soldat*, in: *GWE*, Bd. 1, Berlin (O), 1974, S. 15.
- (38) ゲープザッテル兄弟については、U. Lohalm, *Völkischer Radikalismus. Die Geschichte des Deutschvölkischen Schutz- und Trutz-Bundes 1919–1923*, Hamburg 1970; W. Theurer / R. Zink, Bamberg 1918/19. *Regierungshauptstadt auf Zeit*, in: W. Wagenhöfe / R. Zink (Hgg.), *Räterepublik oder parlamentarische Demokratie. Die „Bamberger“ Verfassung 1919*, Bamberg 1999, S. 51; I. Mayerhofer, *Bevölkerung und Militär in Bamberg 1860–1923. Eine bayerische Stadt und der preussischdeutsche Militarismus*, Paderborn 2010, S. 363, 398–399, 431, 475, 483; B. Hofmeister, *Between Monarchy and Dictatorship. Radical Nationalism and Social Mobilization of the Pan-German League 1914–1939*, Georgetown 2012; B. A. Jackisch, *The Pan-German League and Radical Nationalist Politics in Interwar Germany 1918–39*, Burlington, Vt. 2012, pp.26–28を参照。
- (39) オーバーラント義勇軍の結成については、Generalmajor a.D. Ritter von Beckh, *Kurze Notizen über die Teilnahme des Freikorps Oberland an der Niederwerfung der Räte-Regierung in München*, Mai 1919 (Abschrift), in: Bayerisches Hauptstaatsarchiv, Abt. IV: Kriegsarchiv, *Freikorps Mannschaftsakten 13/224*, o.Bl.; H. J. Kuron, *Freikorps und Bund Oberland*, Erlangen 1960, S. 17–18; 拙著『暴力の経験史』167–169頁を参照。
- (40) Kuron, *Oberland*, S. 124–131.
- (41) Brief von Bodo Uhse an Hans Severit, 23.11.1921, zit nach: Caspar, *Nachbemerkung*, S. 630.
- (42) Uhse, *Irrtümer*, S. 595.
- (43) Kuron, *Oberland*, S. 152. なお、祖国地区協会連盟自体は、1919年に結成され、1921年に解体された「住民軍 [Einwohnerwehr]」の後継組織であった。
- (44) Uhse, *Irrtümer*, S. 595.
- (45) *Oberland*, München, o.J. [ca. 1921], S. 6, in: Bundesarchiv Berlin-Lichterfelde, NS 26/700, o.Bl., abgedruckt in: O. Bindrich / S. Römer, *Beppo Römer. Ein Leben zwischen Revolution und Nation*, Berlin 1991, Dok. 9, S. 95–96.
- (46) 拙著『暴力の経験史』第4章参照。
- (47) 同上。

- (48) Uhse, Irrtümer, S. 595.
- (49) Zit. nach: G. Caspar, Nachlese, in: *GWE*, Bd. 6, Berlin (O) 1983, S. 744.
- (50) G. Franz-Willing, *Ursprung der Hitlerbewegung 1919–1922*, Preussisch Oldendorf ²1974, S. 252; Mües-Baron, *Himmler*, S. 181–182; H・A・ヴィンクラー（後藤俊明／奥田隆男／中谷毅／野田昌吾訳）『自由と統一への長い道〈I〉：ドイツ近現代史 1789-1933年』昭和堂、2008年、433頁；高橋進『ドイツ賠償問題の史的展開：国際紛争および連繫政治の視角から』岩波書店、1983年、210頁。
- (51) 拙著『暴力の経験史』195-196頁。
- (52) Kuron, *Oberland*, S. 171–173; 熊野直樹「『ファシストの危険』・反ファシズム統一戦線・労働者政府：1923年ドイツにおける社会主義とファシズム」同／星乃治彦編『社会主義の世紀：「解放」の夢にツカれた人たち』法律文化社、2004年、54-55, 58頁。
- (53) Brief von Bodo Uhse an Hans Severit, 29.8.1923, zit nach: Caspar, Nachbemerkung, S. 630.
- (54) Brief von Bodo Uhse an Hans Severit, 12.9.1923, zit nach: ebd., S. 630.
- (55) 熊野「『ファシストの危険』・反ファシズム統一戦線・労働者政府」55-59頁。
- (56) Uhse, Irrtümer, S. 595.
- (57) Ebd., S. 595–596.
- (58) Ebd., S. 596–597.
- (59) Dohnke, Völkischer Nationalismusも同様の見解に立っている。
- (60) Brief von Bodo Uhse an Hans Severit, 3.7.1924, zit nach: Caspar, Nachbemerkung, S. 631.
- (61) 拙著『暴力の経験史』240-241頁。
- (62) この点については例えば、H. Coppi, „Aufbruch“ im Spannungsfeld von Nationalismus und Kommunismus – eine Zeitschrift für Grenzgänger, in: S. Römer / H. Coppi (Hgg.), „Aufbruch“ – Dokumentation einer Zeitschrift zwischen den Fronten, Koblenz 2001; A. Bischof, „Aufbruch“ zwischen den Fronten? Der „Fall Scheringer“ in der Werbestrategie der KPD um das nationalsozialistische Wähler- und Mitgliederpotential, Berlin 2013を参照。
- (63) シェリingerについては、Ebd.; T. S. Brown, Richard Scheringer. The KPD and the Politics of Class and Nation in Germany 1922–1969, in: *Contemporary European History* 14 (2005)を参照。
- (64) B. Uhse, An Stelle eines Vorworts, in: R. Scheringer, *Das große Los. Unter Soldaten, Bauern und Rebellen*, Berlin (O) ²1963, S. II-III.

年表：ボード・ウーゼの生涯

- 1904年 バーデンはラシュタットのプロイセン将校の家庭に出生（3月12日）
- 1908年 父の赴任地の関係から、シュレージエンのグローガウに移住
- 1913年 両親が離婚し、一時祖父母のもとで暮らす
ロマン主義的冒険心からヴァンダーフォーゲルに参加
- 1918年 11月革命勃発により、将校になるという将来の夢を絶たれる
- 1919年 東部国境地域の騒乱を避け、家族とともにベルリンへ移住
- 1920年 短期志願兵として国防省付きの伝令係として働き、カップー揆に参加
- 1921年 ベルリンを離れ、ナショナリスト系日刊紙『バンベルガー・タークブラット』で見習いジャーナリストとしての活動を開始（6月1日）
オーバーラント義勇軍の後継組織であるオーバーラント同盟に参加（12月）
のちのナチ党フランケン大管区指導者ユリウス・シュトライヒャーと接触
- 1923年 ニュルンベルクの「ドイツ会議」に参加（9月1日）
ミュンヘン揆に参加（11月9日）
- 1925/26年 オーバーラント同盟の内紛でメンバーの大部分がナチ党に合流
- 1927年 インゴルシュタットのナチ党機関紙『ドナウボーテ』編集就任（5月～）
「新即物主義」の女性作家マリールイーゼ・フライサーと知り合う（夏）
ナチ党に入党し、党内ではシュトラッサー兄弟率いる「左派」に所属（晩夏）
エルンスト・ニーキッシュ率いる国民革命派とも接触
- 1928年 ナチ党国政選挙第一候補者である元義勇軍指導者フランツ・フォン・エップを公然と批判したがために、機関紙『ドナウボーテ』の編集解任
ナチ党イツェホー支部長に就任（12月～）
- 1929年 ナチ党機関紙『シュレースヴィヒ=ホルシュタイニッシェ・ターゲスツァイトウング』編集長に就任（1月）
ナチ党のイツェホー市議員に
ラントfolk運動を批判する当地の大管区指導者ヒンリヒ・ローゼと対立
義勇軍作家エルンスト・フォン・ザロモンの兄にして、雑誌『ラントfolk』の編集長であるブルーノ・フォン・ザロモンと親交を深める
- 1930年 ナチ党離脱（8月1日）⇔「ナチ左派」理論誌『NSブリーフェ』には寄稿
ザロモン兄とともに共産主義主導の農民運動へと合流（年末）
- 1931年 共産主義に「転向」したナチ派国軍将校リヒャルト・シェリンガーを称揚するKPDの「シェリンガー路線」の流れに合流
ヨーゼフ・ベッポ・レーマー、ルートヴィヒ・レン、アレクサンダー・シュテンボック=フェルモアらが執筆する雑誌『アウフブルッフ』に寄稿

- 1932年 ドイツ全国農民委員会の書記に就任
- 1933年 国会炎上事件を契機とするKPD弾圧の前にパリに亡命、ナチ体制批判継続
- 1934年 自伝的概略「誤りと遠回り」発表
- 1935年 亡命KPDに入党し、「転向」をテーマとした自伝的小説『傭兵と兵士』発表
パリで開催された第1回文化擁護国際作家会議にヨハネス・R・ベッヒャー、ベルトルト・ブレヒトとともに参加（6月）
- 1936年 スペイン内戦に国際旅団として参加
- 1937年 エドガー・アンドレ大隊の史料を集めて内戦のルポルタージュを作成
- 1938年 懼病のためフランスへ帰国／ルポルタージュ『初陣』を発表
- 1939年 国際ペンクラブの招きでアメリカに亡命し、現地で亡命KPDの活動に尽力
- 1940年 メキシコに亡命（3月）、他の反ナチ作家たちの亡命を支援
- 1942年 ヴァルター・ヤーンカやアレクサンダー・アーブシュらとともに出版社エル・リプロ・リブレを立ち上げ、亡命文学の出版を本格化
レンとともにメキシコでの自由ドイツ運動を旗揚げ
- 1944年 スペイン内戦をテーマとした『ベルトラム少尉』発表
- 1945年 ユダヤ系アメリカ人アルマ・エイジーと結婚
- 1948年 家族とともにドイツに帰国し、ソ連占領地区に定住
- 1949年 雑誌『アウフバウ』の編集長に就任（～1958年）
- 1950年 東ドイツ人民議会でSED議員として活動（～1954年）
文化同盟内部のドイツ文筆家連盟初代表就任（～1952年）
- 1954年 自伝的小説の集大成『愛国者』発表、東ドイツ国民賞を受賞
- 1956年～ 中国、日本、ポーランド、キューバ、ソ連を訪問
- 1960年 妻アルマと離婚、二人の息子はアルマとともにニューヨークへ移住
- 1963年 ヘビースモーカーとアルコール中毒がたたり、ベルリンで逝去（7月2日）

* 本稿は、平成24～25年度科学研究費補助金（特別研究員奨励費、課題番号：12J00657）と平成26～28年度科学研究費補助金（特別研究員奨励費、課題番号：14J02680）の交付、ならびに平成29年度九州大学QRプログラム（わかばチャレンジ）による研究成果の一部である。

〈謝辞〉拙著『暴力の経験史』では、gewaltbereitを「暴力をとまなう」と訳していたが、「暴力を辞さない」の方がより適切であることを知り、今回このように修正した。ロナルト・ライベルト氏、熊野直樹氏、後藤啓倫氏からのご教示に感謝申し上げます。